

三本木原開拓史要 (三)

新渡戸憲之

四、三本木原開拓以前の伝翁

三本木原開拓の着手は前記した通り、安政二年八月、伝翁六十三歳の時であるが、こゝでは開拓以前の伝翁について、その壮年時代及び在官時代の面影をしのんでみたい。

文政年間之苦難、川内時代も過ぎ天保元年を迎え、伝翁は三十八才となり、父伝藏は盛岡御支配を仰付けられ、盛岡の土蔵に入れられた。こうして新渡戸一家にも漸く春が訪れた。そして伝翁は相変らず十和田の材木を始め、田名部の松材、槻板、杉、榿木、外魚粕、メ粕等を遠く大阪、越前、加賀、新潟方面へ送り、又新たに購入した千二百石船で融環丸を大いに活用して相当の利益をあげた。又長男十次郎（当時の幼名民彌）は十一才と

なり、次男古陸と共に仙台北城下へ手代奉公をさせ様と、十次郎を伝吉と假名させて芭蕉小路坪屋新七木綿店へ、古陸を木藏と假名させて菊地屋三九郎金物店へ夫々奉公させた。これに対して叔父横川良助は

「足下は俄に減録誓所住居故両親養育専ら思ひし處より商人となり下りて家業を送り両親を安心するも考道と感心罷在るに予沢兩人伝商人になさんと手代奉行に被遣候由取々心外千萬の事なり旧来の武家を廃絶せらるゝ心底歎息に絶えたりし」

と残念がつたが、伝翁答えて

「夫れ人は手足の働きを専らとし知計をめぐらし見込見切に迷はずに剛邁にして決定あるは志

の立つものなり然は幼弱の時手足の働を習ふべきなり仙台店々の風は朝は六ツ時起き夜五ツ時迄見世繁雑にして寸暇あらず五ツより四ツ時迄は算軍の稽古を嗜む昼夜八刻の手足の働あり此中に於て士農工商の道に志を建て武を志す時一旦卑劣の業に落入りたるより憤発し芸術を学ぶに及て三年にして能く十年にも増すべし三民に志す者は押而御事公致すも君用には立たず夫は其儘其好む所に随ふべし扱て御城下君輩の衆を見るに朝は鎗術昼剣術は兵学夜は経学と申立て誠に無碍学びと思はるゝも其實は無用の雑話に過ぎし勤学の所も武弁の業もなし只年を積むのみなり如斯き事に入る時は一生弱弱の身となり物の用に立つべからず依て一旦卑劣に落し手足の働きと煩瑣の爲にするなり士は士に入學すべき様の御示談なり然らば御城下に於て士道所業行届き候に有らは頼入れ熟学も致させん其入ありや

と反問し、却つて伝翁の本心を知らせ安心させた。これ即ち當時の政治経済の中心が、武士より商人

の手に移つていた頃の實地教育の重要性を眞に身につける様、子供の手刀を取り袴を取つて前掛けと与えた父伝の着実な深慮に基づくもので、後年父伝翁と共に三本木原開拓の至難の業を亘若くして完遂させた意志の人、経倫家十次郎として育て上ける強靱な原動力となつたものといえる。

天保三年、四年は奥州大凶作で南部藩の損毛高三千石に上り、收穫皆無の狀態であつた。伝翁は上方漫遊の縁長い旅を續けて奈良、京都、大阪、中国、四国を廻り、帰途は若狭越前を経て京都に歸つた。この時大凶作の事を聞いた伝翁は早速越前の三国港の三国与兵衛を尋ねて凶作国民撫育の対策の教えを乞ひ、加州宮越の錢屋喜太郎へ當時喜太郎は廿二才。有名な錢屋五兵衛の長男として家督を継ぎ、日本の海上王として令名を馳せていたに相談する様にと云われ、錢屋喜太郎宅に止宿し、喜太郎を始め五兵衛にも会い、固許救助米供給の約束をして江戸に歸つた。その間玄く諸國の旧跡を探り、各地の開墾事業を尋ね、又開墾の経験者を訪れて開拓の研究を深くした。江戸の藩

詰勤定奉行金田善左エ門が救助米のことで伝翁を尋ね種々相談した。伝翁は既に加州錢屋喜太郎と三万石約束している旨を話し、善左エ門から南部藩の老職に相談して貰う様取訂ったが、不賛成の人があつた爲に遂に救助米の事は無駄になつた。これについて「一生記」には

「我等は功を争ふにあらず国民救助のみを思ふなり不同意の御役人ある天災を下すなり」

と記して残念がつている。そして

「下民の不逞無嫌と加州錢屋喜太郎取組交渉の旨態飛脚相立申候」

とある。そして花巻に歸つた。

花巻辺でもやはり凶作の爲に食同様の者が多く伝翁は見るに忍びず、手持米四十五俵を出して出入の者や近隣の者へ分配した。当時の米の相場は七斗に付三兩二歩であつた。

南部藩では天保四年八月二十二日救荒の方法を議いて左の令を下している。

一連年打続作合宜しからざる上当年御領分一統不作米穀掘底に付飯料所持無之者困窮可致候

間社町共に飯料の外余分貯置候者は相場を以て相掘の義は勿論分限の者只此節小間居の者救の爲め他米等買入相掘候様取扱可申事

一此節油断は有之向敷候へ共高、蕨根其外食物に可相成り品御百姓共出精致し御置き明年麦作並早穀出来候迄取続輸入体の者は決して相出

不申様何分にも心を用ひ取扱可申事

一郡で旅人の義は相支候筋無之候へ共無用の看入未候はゞ相返し候様取訂可申候勿論逗留無之様申含可送遣事但国益にも相成候用向にて罷通候者にてても右用向有之所迄早々相送候様可心得候事

一他領より座頭並狂言役者の類棄免等可相成程は通し不申送歸し可申事諸勸進の者等は決して入れ申向敷事附兼て公儀へ願上候勸化並諸願勸化は罵と相尋相送可申事

一不作に付畑物等盜取候者も有之候向絶々支配所限り吟味を遂け御村方迷惑に相成不申様老名五人粗申合夜中此油断なく相廻り相吟味致し不法行爲致候者有之候はゞ捕押へ申上候様

可申附事

尚、諸士に給与すべき金穀は現米、金方、扶持方とも当年は三分の一の割合で下付され、酒類の醸造も禁止し、幕府に対し領内凶作につき、直国より米穀を移入しようとしても、同様凶作で移入出来ず、非常に困った事は各記録に明瞭である。この年長男十次郎及び次男古陸共手代奉公をやめて帰る。それより十次郎究憤して文武の道に精進し大いに手が上った。

天保五年正月には伝翁盛岡へ行ったが、勘定奉行漆戸藤石エ門から加州米購入の依頼があったが、前的事もあるので御免蒙る。併し藩では前念し切れず、役人を加賀に派遣したが、果せるかな酒井藩、窪峰藩に三万五千石を売却した後で空しく帰藩するという事もあった。

天保六年も凶作で南部藩の損毛高二十万石に上った。伝翁はこの頃官古港の材木積出しをして利益を上げている。後年の三本木原開拓の資金となった事は勿論である。

天保七年も亦凶作で損毛高二十三万二千石に上

った。

其の後伝翁は江戸に於て米相場で大金を得たが、天保八年四十五才の時、商業もこの位が最高と見切りをつけ、全部整理して花菱へ帰った。後に本家新渡戸縫殿助、南部工佐、向井大和等に盛岡引越をすすめられて、父伝藏夫婦外家族一同をつれて盛岡大清水小路へ移転した。そして本家より分地を得、六十石高となった。こうして川内時代の若い二十八才から四十五才に至る十八年間は伝翁縦横の商業活躍時代で、実に思い切ったその実行力は天馬空を行くの積があった。併し武士の身であり下ら一家悲運の急とは云え、苦勞に苦勞を重ねた商業の道も決して楽ではなかったであらう。不屈の精神、事象に當つての明確な洞察力、人に対する抱擁力等實地に依つてた、も上げられた幾多の収穫は計り知れないものがあつたと思はれる。愈々天保九年、四十六才から伝翁の在官時代となるが、不惑をとうに過ぎたこの年を再び士分として南部藩に任えるその感激はどんなであつたらう。

この年の二月、幕府の巡役使が北海道から野辺地に渡り、盛岡へ来る事となり、この御用懸りが勘定奉行添戸藤右エ門となり、伝翁は入惠割役御付けられ、当所の巡役使接待の藩の出費を以て繋藩の法山を用いて無用の雑費を省いた。又同年三月には江戸城西丸が焼失し、南部藩では公の建築用材として松一万本並びに延鉄三万メ目を献納願ふたが、その献納本御用懸りは本枝にくわしい伝翁に御付けられた。そして松一尺五寸角六間物無節三千本を先ず必要とする事であった。これは当時の代価にしても三十七、八万兩にもなるもので余りに多いのに一驚した。併し四月には田名部榎山の内葉色山麓より出火し、添木山、高橋山、喜和田川山、八幡林山、大畑山等に延焼し、深山幽谷に至るまで一面焼失し、数日後に漸く鎮火した。依つて予定の木材献納は二千石の伐出し、積出しで終った。天保の凶作は毎年であったが、この年も気候不順、八月中に大雨霪あり、損毛高二十三万八千石に上る大凶作、大饑饉となったが、その救済米配給に大きな功勞があった。翌十年には伝

翁は大槌、宮古、野田、五戸、七戸、野辺地、田名部の七ヶ所御山奉行となり、又尾州藩神谷受助と交渉して米五千俵借用の契約を結び、南部藩の米価の騰貴を防ぐことが出来、他の功と共に藩主判済公より御役上下を拜領した。これ以来献納木の後始末をし、藩の金融整理等と江戸に上り、八方活躍して手腕を認められ、同年十二年御勘定吟味役又御勘定奉行御用勤御付けられた。この間の苦勞は並大抵のものでなく、一生記に詳記してある。

天保十三年、伝翁五十文の時、御用勤引受に田甚兵衛の護衛あり、又翌十四年には江戸家老横沢兵庫に強談した爲其の怒に舐れ、御役儀御免になり、半世御取上された。又父のおとがめに依り嫡子十次郎は二十四才で中興御小姓であったが共に御役御免となる等幾多の苦悩が重なった。併しこれらの災難に挫けける伝翁ではなかつた。即ちこの通塞難居中に、数年未草稿していた改正武家系譜並びに歴代武家略伝を認めた。これは伝翁の父稚民が、かつて整理したものを更に詳細に書き上げたもので、百卷に上る自書のものである。こ

れによると日本国中の各武家の系譜が一目瞭然である。

こうしてヤニの不遇時代である弘化二年、父維民は春頃から本年は死去申す可くと断言し、親類に暇乞をしていたが、果して九月六日、今夜死期至ると云い、愛息伝に抱かれて七十六才の生涯を閉じた。時に伝五十三才の時であるが、父の一生をふり返り実に感慨深いものがあつたであらう。

弘化元年五月には江戸城本丸焼失し、又弘化二年正月には江戸麻布の南部藩下屋敷焼失と藩の本質も多かつたが、段々と開墾政策を打立てゝいた。

弘化三年には伝翁、黒沢尻方面の開墾地を物色し、家老からも大開墾に志す様内命があり、黒沢尻通、高木通、飯岡通、沼宮内通等の適地を見つけていた。こうして岩手、紫波、稗貫、和賀の諸郡を巡り、弘化四年には和賀郡黒沢尻に江釣子、下江釣子、長沼村等に、野守高六十三石七斗七升の野守新田を願出で、許されて開墾に着手した。そして数早ならずして何れもこれを上田と化した。この年の十一月には肉伊郡野田通の農民強訴を企て、

宮古、大槌附近の農民と誘ひ遠野まで押寄せた農民一揆が起り、伝翁も本張を命ぜられ、その鎮撫策宜しく帰城後御褒詞を頂いた。

嘉永元年には津輕三厩へ蜚入上陸の爲、探索として出張を命ぜられ、ついでに津輕地方を視察して帰った。後、四月再び御勘定吟味役御付けられ出精に付き、御召上下を賞賜された。十一月には勘定奉行御付けられ又御国産御用懸り御付けられ猪、漆等の苗圃を設け、茶園を作り瀬戸焼、硝石製造所等を設ける等産業方面にも盡力し、小袖を拜領した。翌二年には惣山懸り、御要害御普請懸りも命ぜられ、中津川筋の護岸工事を冠し数百間を石組とした。又翌三年には松前並海岸防禦御用懸り、御藏御用懸りとなつた。嘉永四年には先の弘化四年願上の新田御検地の結果五十五石五斗余を得、従来の稜高と合して高百石五斗余となつた。翌五年六月には伝翁は岩手郡上田、新庄、加賀野、川目、下園川の五ヵ村九十石三斗余の野守新田を志願して許可され、更に本家左金吾知行新田願として、岩手郡向中野、平石、安庭、滝沢、本宮の

五カ村、志和郡太田、三本柳の二カ村、和賀郡江釣子、藤根、安俣、十二箇、高松、岩崎、長沼の七カ村、稗貫郡宮ノ目、湯本の二カ村、北郡穴落瀬村、相坂村の二カ村の都合計五百五十石七斗余の野竿新田願出も許可された。こうして岩手、志和、和賀、稗貫の諸郡二十一カ村にある開墾地へも直接出掛けて種々整備させ、農民を移住させる等その合理的な用意周到な計画性を以て着々と成功を収めていった。

全五年八月には北郡七戸通三本木開墾及び用水普請の仕様見分の爲、出張を命ぜられた。これは伝翁が勘定奉行勤役中三本木新田開拓を断言していた爲である。この時の事は「一生記」に

「測量方北田島人長沢文次穴堰普請家柄竹村善右エ門外後藤村吉助理喜藏兩人右五人召置候は、行届可申哉と申度候処夫々聲し召置候様の手にて五戸新田田村へ罷越與治宅に止宿仕右ふ取を以て仕程相調申候」とある。又

「穴堰は向五百六十間程穿抜候は、上水可相成

入用は二千五百兩程も懸り可申、々々

と書いてある。併しこの穴堰の回数及び費用の点では最初の小計画に依るものである。後年大々的な計画に変更されるのである。こうして、かの苦難時代川内より下和田山材木伐り出しの頃から夢に画いた三本木平南拓の大事業が段々と実現可能への望みがおこつた。併しこの計画も家老石原、江の反対にあい中止となつたが、開拓への熱意は三本木へ、三本木へは燎原の火の如く燃え盛つ、やがて安政元年八月、藩政整理の爲取上げに所謂十カ耳土の制度の爲、藩士の中には新田開墾を志すものが多くなつた。伝翁は喜藏助と謀り、三本木平南拓の事を発表して同志を募つた。松岡七左衛門を始め各地の富裕の者まで二十有余名の有志が賛成し、其の出願高は千五百石に達した。この計画を家老戸栗官在衛門に述べ、激励されて力を得、安政二年五月伝翁六十三歳の時、三本木平新田願書を提出した。

かくして八月朔日新田願の通り許可され、同時に伝翁は新田御用懸りを仰付けられた。三十年春

の宿望が叶えられ伝翁の喜びは流石に大きかった。

五、三本木原と十次郎

三本木原と新渡戸十次郎との関係は本誌創刊号

の三十三頁に記し、文伝翁の後継者となり南拓に従事した事を挙げたが、こゝでは今少し詳しく、その入となりや、三本木原南拓以前の活躍並びに南拓と共に三本木市街東西南北十二丁四方の雄大な都市計画の實行等、三本木原南拓の大きな功と共に、父を助けた努力の事績を綴つて見たい。

新渡戸十次郎は伝翁の長男として文政三年六月十一日花巻城に生れた。幼名は民弥、諱を常訓（つねのり）字は照孫、洋々斎と号した。後、南部藩主利剛公より愛養堂及び謙斎の号を賜わった。諱号を玄幹剛弼と云う。

十次郎誕生の時恰も南部藩主利剛公薨じ、花巻城改革の爲城中騒然たる時であり、その頭領と誤解された祖父雄氏は罰せられて半地没収され、一家は下其郡川内に移された。生後間もない十次郎にとって一家の急な流転は多難な人生行路のキ一

ホとなつたのである。そしてこの苦難こそ三本木原と十次郎を強いえにしの糸に結びつける結果となつたのである。

父伝は安野屋素六と名乗り商業を営み、血氣盛んな三十代を十和田山のけやき沢、田名部の松林、海産物等と江戸、大阪、越前、加賀、新潟へ積出し縦横無尽の活躍をした。

天保元年三月十次郎（幼名民弥時代）十一文の時、弟古陸と共に弘台城下梅原屋平右エ門の口入で弘台芭蕉小、踏坪屋新七木綿店へ伝吉として、又菊地屋三九郎金物店へ大藏として夫々仮名を用い兄弟して手代奉公に出された。これは偏に當時の政治経済の中心が武士より商人の手に移つた頃の實地教育の重要性を真に身につける様、子供の希刀を取り降を取つて前掛を与えた父伝の深慮に基づくものに他ならない。後年三本木原南拓の至難の業を年若くして完遂した意志の久十次郎の強い原動力となつたものと云えるのである。この頃の事情を「一生記」にはこう誌してある。

十月盛岡迄歸り親類共へも尋ね候處杖妻の叔父

横川良助といふ有算筆に達し徳実頑意の人なり
難じて曰く足下は俄に減録所往居成西親養育
専ら思ひし處より商人となり下りて家業を送り
両親を安んじても孝道と感心罷在るに子供兩人
迄商人になさんと手代奉公に被遣候由扱々心外
千萬の事なり旧来の武家を廢絶せらるゝ心歎
息に絶えたりと云ふ太素答えて夫れ入は手足の
初きを賣らとし知計をめぐらし見込見切に或は
ず心剛速にして決定あるは志の立つものなり然
らば幼弱の時手足の仇を習ふべきなり仙台店々
の風は朝は六ツ時起き夜は五ツ時を見え繁雜に
して寸暇あらず五ツより四ツ時を見え算筆の稽古
を嗜む蓋て八刻の手足の働あり此中に於て土農
工商の道に志を建て武を志す時一旦卑劣の業に
落入りたるより憤発し芸術を學ぶに及て三年に
して能く十年にも増すべし三民に志す者は押而
御奉公致すも君用には立たず夫は其儘其好む所
に隨ふべし我御城下若輩の衆を見るに朝は鎧術
急剣術夕は兵字夜は經字と申立て誠に無障學び
と思はるゝも其実は無用の雑話に過ぎし勤學の

所も武弁の業もなし只手を積むのみなり如斯
事に入る時は一生隨弱の身となり物の用に立つ
べからず依て一旦卑劣に落し手足の働きと憤発
の爲にするなり 士は士に入學すべき條の御示
談なり然らば御城下に於て土道所業行届き候に
有之らは頼入れ熟學も致させん其人ありやと反
問せしに良助左様御尋候へは其人ありと申さ申
す御心成承はる上は安心申なりと云ふ。

天保四年九月手代奉公も終り、以来文武の道に
精進し幼少よりの材に磨きをかけた。その強性は
豪快油達、よく物事を整理し総てに勤勉な性格が
養われて行つた。

十五文にして初めて藩主利濟公に御目見えをし、
十九文の時算術勉強の爲江戸に上り、南部の花時
と云われたとの事である。帰國後天保十一年二月
伊東彈右衛門祐之の次女勢喜子と結婚し、後御目
付所御物書となり、二十一次の時藩学々生を命ぜ
られ學頭となった。後御側御物書、中與御小姓と
なり、御紋御祚を拜領した。天保十四年九月十四
日長男邦之助（後に藩公より七郎と命名され七郎

となる。出生、後藩公連枝の兵学御相手となり、鍋山敷内政後、御勝手方兼帯の後新屋形御普請掛となり、弘化三年二十七文の時江戸藩邸話め、嘉永元年には新藩主利義公御入部に御供して盛岡へ下り、道中中興御小姓を命ぜられ、大綱戸奉行となり、利剛公の御供をして江戸へ上り、同三年江戸に於て南郡藩最初の軍艦「虎丸」の御造営御用御付られた。へ虎丸御軍船御造立之図として石目五百五拾石目程、船形六百五拾石目程、嘉永三年石川皇にて造十次郎図と記入ある実物図並びに虎丸御軍船御乗初之図として大畑に於て乗初め嘉永四年七月十次郎書と記入ある実物図を新渡戸文庫保存。同四年三十二文で江戸御勘定奉行となる。藩主の御相手となり織御熨斗目を拜領、次いで精勤の爲御着衣を拜領した。同六年南郡市坂守の御家老兼帯、奥勘定奉行兼帯、安政元年御経学御相手、御勘定奉行となったが時に三十五文の若冠であり、君側にあつて御用繁多、実に目まぐるしい活躍をされた。同二年奥御用重所藤上御調所吟味方並びに御省略調を命ぜられ、御長袴拜領、箱館

エトモ等の陣営建築に成功し、その功に依り袴を拜領した。これは寛政二年三月幕府は蝦夷地を松前藩より収めて幕府の直轄とし、南郡伊達、佐竹、津軽の諸藩に命じてその地を守らせ、南郡藩の兵士を蝦夷地に派遣し、その警備区域はエサン岬より東蝦夷ホロベツまでの海岸と定められての事である。そして同年十月には十次郎北海道の帰途安政二年八月から三本木新田南免願許可された父伝翁の六十三文の情熱をかけた新田御用懸り振りを見ると共に三本木原南拓の工事現場を訪れ、久し振りに喜びの親子対面をした。又同三年には利剛公海岸御巡視の爲三本木通燭の際御供し、野辺地、泊、尻旁、大畑、易国間、大間、股野沢等下尻半島各所に御台場築立に成功した。へ松前図、箱館御陣屋御引請地處絵図面並びに野辺地村湊浦大砲台場之図、泊村中山崎、尻旁村内湊崎、大畑村湊浦、易国間村明神下、大間村高磯崎、股野沢村日和山各大砲台場之図他多数新渡戸文庫保存。工事終了後は三本木中振村の父を訪れ共に激励し合った。後賢として袴及銀二枚拜領した。同四年正月兵学

申上げ、藩公の御相手を命ぜられた。

この頃は父伝翁辛苦の南拓も三本木に向う一番穴壇熊の沢と矢神岡千四百十二間の隧道が完成し、天神と京の諸間八千五百間陸壇普請が済み、続いて二番穴壇法量段ノ台間工事半ばの頃、伝翁は再び藩財政建直しの為御勘定奉行御付けられ、三本木原南拓中の故を以て辞したが許されず江戸の藩邸に去った。併し伝翁は南拓継続の意志変わらず、代りに十次郎を後継者とした。安政四年二月三十ハヤの十次郎三本木新田御用懸りを御付けられ、南拓に関する父の抱負を聞き、嗣子邦之助に當時十五文平常光後七郎に同道し、三本木中塚に至り父の業を継ぎ、文久二年四十三文に至る六年間を南拓工事に心血を注いだ。安政四年五月には法量、段ノ台間九百間の隧道完成し、京ノ館深堀三丈五尺、五百八十間の陸壇も出来上り、五年には天神より三本木村迄の千九百間の平壇掘工事と共に高清水源堀を始め、嗣子邦之助もよく工事監督に当った。四月二十四日試に稻生川上来し、三本木の東迄水初めて来た。併し途中の京ノ館陸壇

の一部に不良の箇所があり修理を行った。新入工河川である稻生川に新しい稻生橋の架設工事後一時十次郎盛岡に帰り御小納戸役に昇進した。其の間伝翁の養子収蔵(平常々)が工事の監督に当った。再び十次郎三本木に決ったが、この頃の資金難は実に大きかった。殊に京ノ館の難所は非常に困難を極め先に決潰した程の箇所でもあり三大難所の一つであった。この修理に必し程の苦勞した。次の安政五年十月二十二日ハヤ大塚屋儀兵衛宛てに五百両の資金調達依頼状を見て、その苦心の程が伺える。

彌御安靜珍重ニ存上候 先日ハ力藏まで大ニ御世話有之奉謝候所尚又此度さし上候番細ハ御両所さまへ紙面を以申上候 此度之人足引揚追々貴君御留主中より之差遣りの爲五百金無之候得ハ仕も引揚候様惡之責くも黒くもいたし方なく当窓罷在候又願ましく願事も恐入下併今ニ至り出處もなぐさを向ふ商の取斗也 御下置のほごもいたき斗に候得とも 仕懸り之は等 中々手を引れ不申 是非上水十分と安心仕度末春ニ

至隨冠し方のにしたし申度尤京ノ諸深堀ハ細く
堀候故糸程未春崩れ可申

右之儀ともいづれ大堀にて成就いたし候故糸春
は仕付方いたし度 夫故いづれにも不亂よふ今
日迄追付其分ハ引揚方ハ如何よふにも歎願仕候
心得之處 余リ金高余斗に相成候 右可願様も
過分ニ候故何分唯々当惑の外いたし方無之さり
とて諸職人足之類日雇ニ度し可申様ニも相成
不申なれども大堀成就ニ至り候而世間へ御申わ
け相立有之候とも 其場如何にも当惑ニ候 思
ひもふけし事とハ存候得とも 見込より過分ニ
候得ハ 今更改て当惑ハ相増申候 何分にも都
両君へ御教成被下候様奉頼候 余ハ力穢よりも
可得意意申々申残 不向ニ候

十月廿二日

十次郎

儀兵衛様

こうして京ノ館深堀の堀底修理も竣功し、藩用
で盛岡へ公立、同六年再び三本木に戻り、赤沼、
晴山、三本木町通り忠兵衛堀等の分堀測量を行い、
和之助も従事し、又十次郎の奥弟太田鍊八郎へ伝

翁の四男、太田家の養子となり後に時政と改名し
も工事の監督に當つた。四月には父伝翁江戸の御
役儀御免となり、再び懐かしい三本木に来、南首
に心血を注ぐなど一家一族皆心を合せて精勵し
た。

安政六年五月四日、待望の稻生川上水完成し、
十和田湖、奥入瀬の清流は三本木原に滔々として
注ぎ、遂に荒涼たる狐狸の巢窟でしかなかった三
本木原にも黄金花咲く十万石開田の喜びへの満い
のオー歩となつたのである。

父伝翁の感激や如何。十次郎の喜びと共に嫡子
邦之助外一族の感動は言葉に云い表わす事が出来
ない程であつた。

それより益々父伝翁と協力して盛んに開田をし、
万延元年四月には初田植をし、今日も初田の地名
が残っている。三本木新聚の町割は上杉流兵法に
依つて行い京都の街に模し、本通十二町東西裏の
所謂十二町四方の町地を定め、八町巾の真直な道
路約一里東西裏通巾六間とし、町割は忽二階榎並
に限られるなど新聚に相応しい構想であつた。本

の香りし新しい二階建、その頂では珍しい紅葺の町家が旅入を驚かせた。新橋の痕初めも行った。

同年八月には藩主利剛公の三本木開拓の視察があり、勞を嘉して街に稻生町、上水路を稻生川、橋を稻生橋と命名された。盛に防風林を作り植林を奨め、京都より陶工東上を雇い瀬戸物を焼いた。

今に残る瀬戸山の地名はこの爲である。この年初めて米四十五俵の收穫があり、文久元年與瀬村に養蚕所を開き十次郎の妻勢喜子も来て盛んに養蚕に従事した。この年豊作で新田豊作祝を催し、又凶作に備えて馬鈴薯の種薯を全農家へ分けた。同二年二月十次郎は老母知恵女（六十六文）を連れ三本木へ到着、用水入口から穴堰まで残り本案内し、街の区割其の他を案内説明し大いに孝養を盡した。やがて八月三日（新暦にして九月一日）三男稻之助（後の稻造博士）盛岡に於て生る。これは元年三本木新田に対し藩主より命名された稻生町と、初めて稻の出来た時に身籠ったのに因んで名付けたのである。後、鐸物並びに製革業を起し、市場を設け、稻荷神社の建立等、水を通し、

街を割り、田を墾し、三本木開拓の事業成功の姿大いにあらわれたが、藩の重要任務の爲十月に十次郎盛岡へ帰り、御勘定奉行御元締兼帯、御銅山御国益諸藏等の御用掛江戸詰仰付られ又伝翁も十一月表目付御元締兼帯仰付られ、三本木新田の経営は相次いで二大柱石を失うこととなり、收藏三本木新田御用懸り仰付られ、伝翁、十次郎に代り南拓に従事した。続いて太田練八郎三本木新田御用懸り仰付られた。文久三年四月振駒市場が開かれ、主目的に有名な三本木振駒市場の始めである。御用人御側御用人御元締兼帯の後十月には江戸在勤中の十次郎は御用銅御直増抜群の功があり、三本木南拓に五百兩を送り、翌年から十ヶ年向二千兩宛拜借方差し許され又百石御加増、後御用勤掛鉄鉉山掛となり、京都大阪へ行き八月江戸へ帰った。この頃は京洛及び江戸共に御維新の風雲急なる時であり、元治元年七月蛤御門の変がある等固嶺嶽然たる有様であった。この上洛中にも三本木開拓の事業を夢にも忘れず、稻荷神社の神輿、祭典用具を購入して三本木へ送り、又南拓加入に寄

院を説き廻つたのもこの時である。又利剛谷より御賞詞があり、後藤光昌作三所物拜領し、慶応元年利剛谷の御供で盛岡へ下り、御召物御背割羽織拜領するなど異教の寵遇を受けるのを圓老の忙輪図畫、南部監物らは不快として十次郎に反対していた。同年五月には前に購入した箱崎神輿は大阪より到着するし、又澄円寺並びに理念寺落成する等、萬民偕樂の新しい三本木として発展して行つた。

同二年四月より一期開拓事業は成就したので、伝翁、十次郎は東海岸百石村まで反ぼす大規模な二期上水計画を立て、穴垣三方所長さ四千五百六十六間、陸壇長さ三千五百七十七間合計八千四百四十三間の大きなものであった。併しこの様な開墾地積の宏大や経営の困難又藩の事情も御維新の風雲の蔵己むなく開墾半ばで中止した。(翌三年より上水願許可されて着工した)その七月頃十次郎と同議の元老猶山佐渡が職を辞するに及び、疋輪氏益々君側にはびこり遂に十次郎病と称して職を辞した。

然るに江戸に於て用人勤役中藩政困難につき、

領中の絹を税に取上げ、直接フランス人に売り、その収入の一部を三本木開拓の事業に充てようとする策した事が、国産を外国に与えるは怪しからぬと讒せられ、慶応二年九月十六日他出を禁ぜられ、白石を没収し、焼畑の上親類に預けられ、蟄居を命ぜられた。

たれこめてきりもかしこし世の中を

吹きすさひ行く木枯のかせ

と悶々憂憤の情を述べて、病床に横たゆる身となり、後に誤解も解け、同三年十二月十日罪を免ぜられたが遂に起たず、十二月二十四日あたら四十ハ才の若さを以て前途洋々たるべき人生の幕を閉じて了つた。新妻戸家の菩提寺である盛岡久昌寺に葬つた。

十次郎は父伝翁に比して理想家であり又情熱家でもあった。三本木原十萬石の開墾と共に小川原沼から青森湾へ豊河を掘り、尻矢岬を廻る渡海の航路を省く計画を立てたが、僅か二町の用水路を掘つただけで藩用の爲三本木を去り、心を残して死んで了い、三本木原開拓途上の大きな支障と

なつた事は洵に惜しい極みである。

十次郎の死が早飛脚で三本木にもたらされた時は、さすが大腹の父伝翁も色を愛じ、その手紙を持つて思ゆす声を立て、立ち上つたので、何事かと左右の若まで驚愕したと云う程翁もその死を非常に哀惜した。

三本木新駅の人々から晉段から非常に親しまれていた事とて、十次郎を追憶する人々は、後に明治四年九月二十七日伝翁の逝云された後再び父祖の業を継ぐべく同年十二月三本木に来た七郎と共に、同五年四月伝翁の愛顧を受けた安野清兵衛、高岡権十郎らが中心となり同志を募り、十次郎の靈を二丁目西裏旧三本木役場前に御壺を建て（八月上棟）、拜殿を設けて祀つたが、後本殿を太素塚の靈域に移し、御位牌堂とした。昭和二十九年五月四日、稻生川上水九十五周年記念の佳き日を卜して、本墓地盛岡久昌寺より分骨し、新渡戸十次郎墓碑が立派に太素塚に父伝翁と並んで建てられた。又、顕彰碑文には

（前略）周囲に十万石の墾田を繞らすの志願

規模極めて雄大 三本木街の基礎実に此人に

成り（後略）

と誌され、実際に三本木原開拓に功勞のあった事を後世に残して下さった稻生川土地改良区外関係各位の御厚意に對しては地下の十次郎の神靈、たゞと感激あるのみと察するものである。

尚三本木開拓の計画に關し万延元年秋、伝翁父子の名をもつて朝野の志士、民間企業の篤志家に對し發表した「三本木平開業之記」は所謂ヤニ上水計画への激文として十次郎の筆になるものであるが、最近各地に発見されている事を知らされ誠に嬉しい限りである。

十次郎の面影は今日写真も絵も伝わっていないが、街の物故者の語り伝え、並びに亡祖母ゆかり伝翁の未婚の語り草でも、稻造博士に丁髷を結わせるとぞっくりであると思われれた事を記し、御想像して頂き度いと思ふ次第である。

——完——